

5199-35

早稲田大学大学院理工学研究科  
早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨  
2987

# 博士論文概要

## 論文題目

帝政期のウラジオストク中心市街地に  
おける都市空間の形成に関する歴史的研究

申請者

佐藤 洋一

YOICHI SATO

1999 年 11 月  
(西暦)

日本海を取り囲む近隣諸国は、政治・経済状況の変化による歩み寄りで相互の関心を高めつつある。沿岸自治体や民間で見られる交流活動が近年定着しつつあり、今後ますます活発になることが期待されている。現在、学術分野には交流を確かなものとする歴史・民族・文化・自然などの基礎的研究が求められており、研究を通して相互理解を促進させることが重要な課題といえる。

こうした背景のもと、本論文は帝政期におけるウラジオストク中心市街地の都市空間の形成を主要な対象として歴史的な考察を行う。本論文はロシア極東の都市の形成に関する国内での初めてのまとまった成果であると思われる。対象時期は都市の開基（1860年）からソビエト政権が樹立される1923年までとする。

本論文は、序論（1～2章）、本論（3～9章）、及び終章にて構成されている。

「第1章 研究の枠組み」では、関連の3研究領域、すなわち東北アジア近代都市形成史研究・ロシア極東地域の都市研究・日露交流史研究との関わりから、本研究を進める上での前提的事項を論じた。近代以降に帝政ロシアによって建設が始まったロシア極東・中国東北地方の都市形成に共通する性質として、①未利用・未開拓であった土地に形成され、都市建設や都市経済の実質的な部分は多くの流入者によっていたこと、②その形成主体は単一ではなく、出自の異なる複数の文化集団を多元的に想定すべきこと、の2点を挙げ、この視点に基づいて研究を進めたことを示した。研究の方法では、本論文において用いる文献・新聞・地図・絵葉書・写真などの用法と資料的な妥当性を検討した。

「第2章 既往研究の整理と本研究でのアプローチ」では、関連3研究領域の既往研究をレビューし、そこでの研究視点と研究課題を指摘し、本論文を位置づけた。本論文に望まれる研究課題として、①複数都市を含んだ広域的観点からの比較研究、②ロシア極東都市に関する研究、③植民都市としての発生と形成の特質、④都市計画と建築の中間スケールに着目した研究、⑤極東の中国人の諸活動に関する研究があることを指摘し、本研究の基本的なアプローチを示した。

「第3章 ロシア極東植民都市の初期市街地計画における空間条件」では、極東地域に位置し、ほぼ同時期に都市建設が進められたブラゴベシチェンスク・ハバロフスクとの比較により、ウラジオストクの都市形成の基層部分を明らかにした。計画範囲と土地条件、市街地骨格パターン、街路・街区寸法、土地ロットの形態・寸法、施設計画の比較検討と当時の地政学的背景から、これらの初期市街地計画は都市の完成形を描いたものではなく、①市街地区域の範囲設定、②分譲土地の形態・寸法、③墓地・教会の配置、④埠頭・市場・オープンスペースなど貿易・交易のための基本的な施設の配置、という4点に主眼がおかれ、国境地域における促進的な軍事拠点及び定住地確保の方策として理解できることを示した。またウラジオストク中心市街地は、①市街地計画面積が最小であり、②街路骨格パターンはグリッドを基調としつつも、随所でグリッドが崩れ、③街路幅員寸法が最も小さいこと、を指摘し、これらが地形要因と軍事的要因によりもたらされたこと

を示した。またこの計画によるロット割りがその後の都市空間形成の基層を成しているため、土地ロットを基本的単位として、以後の空間形成を明らかにした。

「第4章 帝政期におけるウラジオストク市街地骨格の形成」では、1910年代までの市街地骨格の形成過程を市街地図により概観し、①1880年代までは、金角湾に沿って東西方向に市街地が拡張し、②1890年代以降には、市街地骨格は背後に位置する山地を越えて北側へと延伸し、南側へも鉄道駅開設や商業埠頭の整備と相まって市街地が延伸し、③1906年に市街地全体計画が立てられ、それ以降は、未利用の北東方向に大規模な市街地形成が計画されたことを示した。次に市内9地区の市街地骨格の街区形状、ロット割りに着目し、①長方形街区の他に1900年頃より半放射型街区が見られるが、街区内のロット割りには手法的な差異は見られず、②街路幅員は10サージェンが最低の幅員となっていること、という共通点を明らかにした。重ねて前章で挙げた地形要因と軍事的要因の影響を論じ、前者については①グリッドパターン、②半放射型街路配置、③地形と整合した市街地骨格、と地形への対応手法が進展したことを明らかにし、後者については、市街地を圍繞する要塞群による防御ライン、湾岸部分での軍港の具体的な位置を確認し、これらにより、市街地の発展が規定されていたことを示した。そして中心市街地の構造的特質を、①市街で最大の25サージェン四方のロット割、②市内唯一の民間管理の水陸のノードという2点から規定した。

続く第5章～8章では、都市空間内部の事象を具体相の下に明らかにしている。

「第5章 中心市街地における各国人の居留とその空間展開」では、まず空間形成の背後要因としてロシア極東におけるロシア人・中国人・朝鮮人・日本人・西欧人の流入動向とロシア当局の政策的対応の変遷を概観した。極東地域全域で、ロシア人对黄色人種という対立構図が存在したことを明らかにし、ウラジオストクへの流入者の推移を把握した。次にこれらをふまえ、1910年代前半の各種資料をもとに、中心市街地の6街区を主要対象として、土地ロット単位で空間形成に関わる社会層に着目して、彼らの存在の深度を分析した。地主層は1870年代には活動を開始していたドイツ・イギリス系の冒険商人、ロシア人、中国人商人などによって構成され、1910年代にはかなりの規模の不動産を所有していること、建築者層は1890年代以降に活発化した経済活動に起因する建設ブームにより形成され、これにより1910年代においてすでに土地ロットが分割利用されていたことを明らかにした。借家人層のうち、特に中国人系・日本人系の商店はロット毎に偏った分布が見られ、中国人の商店はセミョーノフスキーバザール及びペキンスカヤ通り周辺に多く立地し、ロシア系・ドイツ系などの大規模な店舗が軒を連ねるスヴェトランスカヤ通りと対比的存在であることを示した。

「第6章 旧セミョーノフスキーバザール周辺における街区形態の形成」では、バザール周辺の2街区を取り上げ、土地ロット内の空間利用、建物ユニットの形態パターンから1890年前後における街区形態の復元と、現況との比較を行った。

その結果、①1890年頃の時点で土地ロットがすでに細分化し、ロット内の小ユニットが発生していること、②現況の建物配置からロットをまたぐ大ユニットという空間単位を見出すことができ、これは建物の所有形態と関連が見られること、③ロット内における空間利用の高度化の過程は街区内部へ進入するエントランスの形状の進化に表れており、まず歯抜け型から隙間型へと変化し、更に沿道部の建築物が高密に集積し、隙間なく連続することからトンネル型エントランスが生じたこと、④街区の一部が現在、オープンスペース化されているのは、1960年代以降の建物の取り壊しによるものであり、これにより街区形態の一体感が損なわれていることを明らかにした。併せて街路的な空間がロット内に発生し、これらがつながり多重的に利用され、中国人の生活空間であったことを指摘した。

「第7章 スヴェトランスカヤ通り沿道における都市空間の形成と変容」では、海岸沿いの目抜き通りであるスヴェトランスカヤ通り沿道に現存する建築物を通して都市空間の形成を明らかにした。絵葉書などの資料により沿道建築物の建築年代の確定・推定を行い、開港期（1860～80年代）、建設期（1890～1910年代）、ソビエト期（1920年代～1991年）に分けて、沿道の建築物の建設と変容過程を明らかにした。その結果、①1880年代までの開港期における町並は、簡素な木造建築によって形作られており現存していないこと、②現存する町並のおおよその部分は、この都市の重要性が明らかになりはじめた1890年代～1910年代初頭にかけて建てられた建築物の集積によること、③1890年代以降に建築物の更新が進み1900年前後にそのピークがあったこと、④ソビエト時代には土地・建造物の公有化とともに民間の建設活動がなくなり、増改築やいくつかの新築建築物の建設にとどまり、町並には部分的な変化が見られただけであったことを明らかにした。その上で、建築物を形成した主体は、主に帝政時代の商業者たちであり、その商業機能の表出が前章の事例と対比的に捉えられたことを指摘した。

「第8章 1920年代初頭を中心とした日本人の居留空間」では、現地発行の邦字新聞『浦潮日報』を史料とし、日本人の生活空間の分布と実態、都市空間に対する呼称などから、中心市街地における日本人の生活空間の深度と広がり明らかにした。特に第6章で検討したロット内の空間ユニットが日本人の間で「門内」と呼ばれ、一つの意味領域をなしていたことを、新聞記事の検討などから示した。

最終的には「第9章 ウラジオストク中心市街地の史的意義に関する考察」において、ソビエト時代の空間変容を概観し、今日のウラジオストクにおける歴史的環境保全の流れをふまえて、中心市街地の歴史層を明らかにし、その史的意義について考察を行った。以上、本論文ではウラジオストク中心市街地の内部的な諸事象を明らかにしたが、その成果はロシア極東都市の形成に関する基礎的研究として位置付けられ、国内で類似の研究の少ない帝政ロシアによる東北アジアの諸都市の空間形成を考える上での糸口を示し得たと思われる。

終章は各章の要約である。